モラロジーを楽しく、平易に学びたい――。そんな要望にお応えして、この連載ではモラロジーの基本的な考え方を“図”でご紹介します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

図解！モラロジー入門②

モラロジーの学問的特色とは

廣池千九郎研究室室長　宮下和大（みやしたかずひろ）

道徳実行の道のりにはさまざまな分かれ道があります。

時代錯誤な道徳、頭ごなしで教条的な道徳、グループ内だけの排他的な道徳、ところ変われば通用しない道徳などなど。どれも知らず知らずのうちにはまり込んで、せっかくの道徳の価値を失わせてしまうものです。

こうした袋小路を避けて、より高く、より先へと歩み続けるために、モラロジーは「学問」として提唱されたのです。

第一に、学問とは発展的なものです。これまでに築き上げられた地平を乗り越え、常に最高の地点を更新して前進するものです。モラロジーには最高の道徳を常に追求して進む学問的な態度と関心があります。道徳そのものも時代とともに変化するため、現実に適さない道徳に価値はありません。モラロジーは既存の道徳の内容をよく吟味し、新たな改良を加えて前進をはかろうとしています。

第二に、学問には公共性と公開性があります。一つの地域や民族、文化、思想、宗教の内側でのみ通用するものではなく、人類に開かれたものです。学問としてのモラロジーの提唱には、誰もが納得できる道徳（コモンモラリティー）を追求し、誰もが納得できるように道徳実行の効果を明らかにしたいという意思の表明があります。

さらにモラロジーには「総合人間学」という学問的特色があります。モラロジーは道徳・倫理・哲学・宗教・歴史の研究をはじめ、自然・社会・人文諸科学の研究成果にもとづいて道徳の原理・内容・実行の方法を研究する総合人間学です。

また、モラロジーの学問的特色として「実践性」の重視もあります。どれだけ精緻（せいち）な理論体系でも、実践できない机上の空論では意味がありませんし、たとえ実践できても誰も行わないのでは価値がありません。

モラロジーではその意義に賛同する多くの方々が、モラロジーの研究に基づいた道徳的実践を通じて、学問としてのモラロジーを前進させる一翼を担っているのです。

図3　なぜモラロジーは「学問」なのか